

強者の戦略

今回の設問形式は京都大学では長らくお目にかからなかったものであり、東京大学でも最近の数年間は見なくなったものです。そのことを以て「入試直前に最新形式でない問題にかかざらう余裕なんてないよ」という考え方を私は否定するつもりはありませんが、真の強者を志す貴方であれば、この時期に敢えて視点を変えて京都大学が受験生に求める力を理解して頂けるのではないかと思います、この問題を選びました。文挿入・整序問題では文レベルの論理展開や指示語・時制の整合性を確認しなければなりません、この力は現在では第3問（和文英訳問題）で求められることになります（もちろん、自由英作文を課す東京大学や大阪大学でもこの力は必要不可欠です）。要するに、求められる力の種類は本質的に同じであり、それをいかに発信するかが昔と今では異なっているだけなのです。

本問のようなタイプの問題に取り組む際の基本的なアプローチを確認しておきましょう。

①選択肢から前後関係を特定する情報を確認する

ex. 指示語、新情報－旧情報、論理関係、抽象－具体関係など

②本文の要旨を把握しつつ読み進める

・空所のないパラグラフは最低限の論旨を把握する

・空所を含むパラグラフは空所前後の文の論理展開の整合性も確認する

東京大学の同種の問題についても当てはまりますが、空所の直前直後だけを見て答えが絞れるほど京都大学の問題は甘くありません。本問の場合はパラグラフ分けのない文章ですので、1文ずつ内容を確認してゆくことになります。但し、空所から離れた文の意味把握はほどほどに、近接する文の意味把握は綿密に。が、その前に選択肢をざっと一読しておきましょう。細かな内容を追う必要はありません（1文1文丁寧に読んでいては幾ら時間が合っても足りません！）、指示語の有無や論理関係のキーワードを把握しておくことは、本文との照合の際に大きなヒントになります。

まずは選択肢（a）から。

- (a) **Man** needs warmth, society, leisure, comfort and security: **he** also needs solitude, creative work and the sense of wonder.

「人は暖かさを、社会を、娯楽を、快適さを、そして安らぎを必要としている。また、人は孤独を、創造的な仕事を、そして不思議さの感覚を必要としている。」

指示語としては **he** がありますが、指示対象も(a)の中にあるので完結してしまっているように見えます。ですが、**Man** が後続文の指示対象となる可能性は残っています。

- (b) If **he** recognized this **he** could use the products of science and industrialism *eclectically, applying always the same test: does this make me more human or less human?

「もし彼がこのことを認識していれば、科学や産業を取捨選択して使用することができ、『これによって私をより人間らしくなるのだろうか、それともより人間でなくなってしまうのだろうか』という同じ問いを常に投げかけることができたのだろう。」

強者の戦略

早速(b)で指示対象が不明な **he** が登場しました。もし指示対象が **Man** なら(a)→(b)の語順が確定しますが、この時点では断定できません。もうひとつ注目したいのは、(b)が疑問文の形になっていることです。反語の場合(「~だろうか、いや、そんなはずがない」といった形)を除き、疑問文の後ろには応答が続くことになります。空所の後ろにこの問いかけへの応答がないか、或いは応答になっている選択肢がないかに注目する必要があります。ただ、(b)の場合は **the same test** とコロン(:)で結ばれていますので、問い(test)の具体例として疑問文が挙げられていることになります。なので、この文に限って言えば、必ずしもこの疑問文への直接的な応答が続く必要はありません。

前文に指示対象がある筈！

- (c) I have no doubt that, all over the world, hundreds of pleasure resorts similar to **the one** described above are now being planned, and perhaps are even being built.

「世界中で先に述べたような何百もの娯楽施設が計画されていて、恐らくは建設されてさえいるのは疑いない。」

(c)の位置を決めるヒントは **the one** です。娯楽施設(pleasure resort)に関する記述が空所の直前にあれば、これが正解の可能性が高いです。

前に指示対象がある可能性あり！

- (d) **The** music prevents **the** conversation from becoming serious or even coherent, while **the** chatter of voices stops one from listening attentively to **the** music and thus prevents **the** onset of that dreaded thing, thought.

「その音楽は会話がまじめなものになったり一貫性のあるものになったりするのさえ妨げ、一方で声でのおしゃべりは人が音楽を集中して聞くのを妨げ、それ故にあの忌まわしきものである思考に着手するのを妨げるのである。」

定冠詞 **the** が5つも含まれていますが、少なくとも最初の2つの名詞 **The music** と **the conversation** には前文に指示対象がある、つまり空所の前に音楽と会話に関する話題がある可能性があります。また、前文との論理関係を示唆するキーワードがない場合は前文と同趣旨の話題になっている可能性がきわめて高いです。

例外的な例を挙げるときに用いられる

新情報

- (e) **Even** the pleasure one takes in **a flower** — and this is true even of a botanist who knows all there is to be known about **the flower** — is dependent partly on the sense of mystery.

旧情報

「人が花に喜びを見出すのでさえ、部分的にはあるが神秘の感覚に依存しているのである。そして、これは花について知っておくべきことの全てを知っている植物学者にさえ当てはまるのである。」

今回は直接的に解答には関係ありませんが、冠詞と定冠詞の使い分けについては注意が必要です。この文には **a flower** と **the flower** がありますが、前者が新情報で後者が旧情報ということになります。(d)で定冠詞に注目するよう指摘したのも、この情報構造を念頭に置いてのことです。また、**even** は例外的な事柄を強調

強者の戦略

するために用いられますが、それは裏を返すと具体例の一種であるということも含意しています。ということは、花に喜びを見出すことが具体例となるような趣旨の内容が前文に来ている可能性が高いです。

(前文からの)結論を導く

- (f) Isn't there, therefore, something sentimental in preferring bird-song to swing music and in wanting to leave a few patches of wildness here and there instead of covering the whole surface of the earth with a network of motorways flooded by artificial sunlight?

「だからこそ、スイング音楽よりも鳥のさえずりを好んだり、地球上の表面全体を人工の明かりに満ちあふれた道路のネットワークで覆い尽くすよりも、そこここに少しは野生の場所を残しておくことを好んだりする何か感傷的なものがあるのではないだろうか。」

(f)は **therefore** が大きなヒントとなります。前文が(f)の内容を導く根拠になっている筈ですから、何か感傷的なもの (**something sentimental**) の存在を感じさせるような話が直前に来ていないかどうかを確認しましょう。また、(b)に続いて(f)も疑問文 (しかも否定疑問文) になっています。そして、この文は(b)と違って疑問への応答を求めるものになっています。もちろん、反語の可能性は残りますが。

(前文からの)帰結を導く

- (g) He would then learn that the highest happiness does *not* lie in relaxing, resting or playing poker. And the instinctive horror which all sensitive people feel at the progressive mechanization of life would be seen not to be a mere sentimental **archaism, but to be fully justified.

「そうすれば、最高の幸せとはくつろいだり休息したりポーカーをしたりすることにあるのではないということを彼は学ぶことになるだろう。そして、ますます機械化してゆく生活に対して繊細な人たちが皆感じている直感的な恐怖は、感情的な懐古主義に過ぎないということはなく、むしろ完全に正当化されることが分かるだろう。」

(g)についても **then** があるので、前文の内容から導き出される帰結が(g)の内容に当たることが予測できます。また、(g)が帰結を表すのであれば次の文はその帰結の補足説明を表すか、或いは(g)で話題が一段落して別の話題に移行している可能性があります。

以上のような選択肢チェックを、せいぜい1～2分で終わらせてから本文に移るのが理想的だと思います (実際にはここまでのプロセスで選択肢の内容もぼんやりと頭に入っていると思いますので、いきなり本文を読み進めるよりも理解しやすくなっている筈です)。

それでは、本文を読み進めてゆきましょう。空所(1)の手前まで一気に読み進めましょう。なお、各文には便宜的に番号 (①～⑬) を振ってあります。

強者の戦略

①The whole notion of admiring Nature, and feeling a sort of religious awe in the presence of glaciers, deserts or waterfalls, is bound up with the sense of man's littleness and weakness against the power of the universe. ②The moon is beautiful partly because we cannot reach it, the sea is impressive because one can never be sure of crossing it safely. ③(1)

「①自然に驚嘆し、そして氷河や砂漠、滝を前にしてある種の宗教的な畏敬の念を抱くという観念全体は、世界の力に対して人間はちっぽけでひ弱であるという感覚と密接な関係がある。②月が美しい理由の一部は、我々がそこに辿り着くことができないからであり、海が強い印象を与えるのは、人が安全にそこを渡りきるという確信をもつことが決して出来ないからである。③(1)」

①と②の関係は、一言で言えば抽象－具体関係になります。①で筆者が指摘している内容（我々が自然に畏敬の念を抱くという観念は、世界の力に比べて人間はひ弱であるという感覚に関係している）に説得力を持たせるために、筆者は具体例として月や海を取り上げています。その内容を受けて(1)が続き、更に(1)の後ろにはこのような文が続きます。

③(1) ④But meanwhile man's power over Nature is steadily increasing. ⑤With the aid of technology we could literally move mountains: we could even, so it is said, alter the climate of the earth by melting the polar ice-caps and irrigating the Sahara. ⑥(2)

「③(1) ④しかしその一方で、人間が自然に対してもつ力は着々と増しつつある。⑤科学技術の助けがあれば、我々は文字通りの意味で山々を動かすことができる。また、言われているように、極地の氷冠を溶かしたりサハラを灌漑したりすることによって地球の気候を変えることさえできる。⑥(2)」

(1)の直後に But が来ていますから、(1)に入るのは後続文とは正反対の内容ということになります。そして、④・⑤は人間が自然に対してもつ力が増しつつあることを指摘しています（ちょうど①・②と正反対の内容です）。ということは、(1)にはこれとは正反対の趣旨が、すなわち人間のひ弱さを指摘する①・②と同趣旨の選択肢が入ることになります。(1)の直前にある②は具体例を列挙したものでしたが、選択肢の中に例外的な例を挙げているものがあつたのを、あなたは覚えていたでしょうか。

(e) Even the pleasure one takes in a flower — and this is true even of a botanist who knows all there is to be known about the flower — is dependent partly on the sense of mystery.

「人が花に喜びを見出すのでさえ、部分的にはあるが神秘の感覚に依存しているのである。そして、これは花について知っておくべきことの全てを知っている植物学者にさえ当てはまるのである。」

強者の戦略

(1)に入るのは(e)となります。Even に引っかかっていたら、もっとすんなりと(e)の可能性に思い至ったかもしれません。

続いて(2)に入るものを検討するために④・⑤文目の流れを見てみましょう。④は①～③とは正反対の内容になっていて、人間の自然に対する力の増大を指摘しています。⑤は④の具体例となっていて、①・②で見たのと同じ展開になっています。となると、(2)にはこの流れに即した具体例が続くのでしょうか。それは④・⑤だけを見て判断することではありません。(2)の後続文を見てみましょう。

⑥(2) ⑦The question only arises because in exploring the physical universe man has made no attempt to explore himself. ⑧Much of what goes by the name of pleasure is simply an effort to destroy consciousness.

「⑥(2) ⑦そのような問いが生じるのは、自然界を探索する際に人間は自らを探索しようとしてこなかったというまさにその理由からである。⑧率直に言うと、娯楽の名の下に行われることの多くが意識を破壊しようとする取り組みなのである。」

⑦の The question が大きなヒントとなります。(2)には The question の指示対象が（おそらくは疑問文が）入ることになります。そして、選択肢には疑問文は(b)か(f)の2つしかありません。あとは、④・⑤の後ろ、⑦・⑧の前に入って整合的な選択肢を選ぶだけです。

(f) Isn't there, therefore, something sentimental in preferring bird-song to swing music and in wanting to leave a few patches of wildness here and there instead of covering the whole surface of the earth with a network of motorways flooded by artificial sunlight?

「だからこそ、スイング音楽よりも鳥のさえずりを好んだり、地球上の表面全体を人工の明かりに満ちあふれた道路のネットワークで覆い尽くすよりも、そこここに少しは野生の場所を残しておくことを好んだりする何か感傷的なものがあるのではないだろうか。」

(f)に含まれる therefore に注目していれば、①～⑤の内容を受けての結論としてこの内容がふさわしいと判断できたでしょう。また、否定疑問文の場合、書き手（話し手）の意見はこの文の肯定形（つまり筆者は「何か感傷的なものがある」と思っている）ということになります。そして、この疑問文が反語であるなら…？

「～ではないのだろうか、いや、きっとそうに違いない」となり、この文の肯定形（すなわち、何か感傷的なものがあるという趣旨）が前面に出ることになります。そして、この解釈は後続文とも整合的です。

⑨If one started by asking, what is man? what are his needs? how can he best express himself? one would discover that merely having the power to avoid work and live one's life from birth to death in electric light and to the tune of tinned music is not a reason for doing so. ⑩(3) ⑪(4) ⑫(5) ⑬For man only stays human by preserving large patches of simplicity in his life, while the tendency

強者の戦略

of many modern inventions is to weaken his consciousness, dull his curiosity, and, in general, drive him nearer to the animals.

「⑨『人間とは何か』『人間の欲求は何か』『どうすれば人間は最も良く自己表現できるか』という問いから始めるなら、電気の明かりの下で、そしてレコード音楽の調べの下で生まれてから死ぬまで仕事を避けて人生を送るだけの力を持つというそれだけのことが、それを行う理由ではないことに人は気付くだろう。⑩(3)⑪(4)⑫(5) ⑬というのも、人は人生における単純さの多くを失わないようにしていることによってこそ人間であり続けているのだが、現代の多くの発明には、人の自意識を弱体化させ、好奇心を鈍らせ、そして総体的に人を動物へと近づけさせようとする傾向があるからである。」

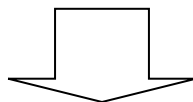
続いて⑨が、そして(3)(4)(5)が続きます。⑬の For は前文である(5)の根拠になるので、ここから攻めて行くこともできそうです。また、残る選択肢は(a)~(d)、(g)の5つですが、このうち(a)と(b)は(a)→(b)の順番になる可能性が濃厚なので、(a)→(b)、(c)、(d)、(g)の中から整合的な3つの連続する文を作れば良い、と考えることもできます。ただ、この時点で(c)と(d)は組み込むことがかなり難しいことが予想できるでしょう。というのも、(c)には娯楽施設に関する記述が、(d)には音楽と会話に関する記述がありますが、(3)の前にある⑨にも、(5)の後ろにある⑬にもこれらに関する内容はありませなし、他の選択肢とも整合的とは言えないからです。ましてや、(c)にあった the one described above の指示対象はどこにも見当たりにませんので、この段階で(c)は不可と判断して良いでしょう。

そのような観点で5つの選択肢を吟味して行くと、正解は次のような順番になるという結論に辿り着きます。

(3)

- (a) **Man** needs warmth, society, leisure, comfort and security: he also needs solitude, creative work and the sense of wonder.

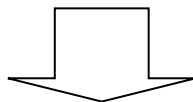
「人は暖かさを、社会を、娯楽を、快適さを、そして安らぎを必要としている。また、人は孤独を、創造的な仕事を、そして不思議さの感覚を必要としている。」



(4)

- (b) If **he** recognized **this** he could use the products of science and industrialism *eclectically, applying always the same test: does this make me more human or less human?

「もし人がこのことを認識していれば、科学や産業を選択的に使用することができ、『これによって私をより人間らしくなるのだろうか、それともより人間でなくなってしまうのだろうか』という同じ問いを常に投げかけることができただろう。」



強者の戦略

(5)

- (g) **He** would then learn that the highest happiness does *not* lie in relaxing, resting or playing poker. And the instinctive horror which all sensitive people feel at the progressive mechanization of life would be seen not to be a mere sentimental **archaism, but to be fully justified.

「そうすれば、最高の幸せとはくつろいだり休息したりポーカーをしたりすることにあるのではないということを人は学ぶことになるだろう。そして、ますます機械化してゆく生活に対して繊細な人たちが皆感じている直感的な恐怖は、感情的な懷古主義に過ぎないということではなく、むしろ完全に正当化されることが分かるだろう。」

(a)→(b)は(a): Man→(b): He から推測できますが、実は(a): Man→(b): He→(g): He の連鎖になっていました。また、(b)の **this** が(a)の内容を指していること、(g)の **then** が(b)の内容からの帰結に当たると考えることが出来るので、この並びが最も整合的だと言うことができます。

以上で、正解は全て確認できました。最後に全訳を示しておきます（話の流れを良くするために多少の意訳を施しています）。

【全訳例】

自然に驚嘆し、そして氷河や砂漠、滝を前にしてある種の宗教的な畏敬の念を抱くという考えは全て、世界の力に対して人間はちっぽけでひ弱であるという感覚と密接な関係がある。月が美しいのは、我々がそこに辿り着くことができないからだというのが理由の一部であり、海が強い印象を与えるのは、人が安全にそこを渡りきるという確信をもつことが決して出来ないからなのである。人が花に喜びを見出すのでさえ、部分的にはあるが神秘の感覚に依存しているのである。そしてこれは花について知っておくべきことの全てを知っている植物学者にさえ当てはまる。しかしその一方で、人間が自然に対してもつ力は着々と増しつつある。科学技術の助けがあれば、我々は文字通り山々を動かすことができる。また、言われているように、極地の氷冠を溶かしたりサハラを灌漑したりすることによって地球の気候を変えることさえできる。だからこそ、スイング音楽よりも鳥のさえずりを好んだり、そこそこに少しは野生の場所を残しておくことを、地球上の表面全体を人工の明かりに満ちあふれた道路のネットワークで覆い尽くすよりも好んだりする何か感傷的なものがあるのではないだろうか。そのような問いが生じるのは、自然界を探究する際に人間は自らを探究しようとしてこなかったというまさにその理由からである。率直に言うと、娯楽の名の下に行われることの多くが意識を破壊しようとする取り組みなのである。「人間とは何か」「人間の欲求は何か」「どうすれば人間は最も良く自己表現できるか」という問いから始めるなら、電気の明かりの下で、そしてレコード音楽の調べの下で生まれてから死ぬまで仕事を避けて人生を送るだけの力を持つというそれだけのことが、それを行う理由ではないことに人は気付くだろう。人は暖かさを、社会を、娯楽を、快適さを、そして安らぎを必要としている。また、人は孤独を、創造的な仕事を、そして不思議さの感覚を必要としている。もし人がこのことを認識していれば、科学や産業を選択的に使用することができ、「これによって私をより人間らしくなるのだろうか、それともより人間でなくなってしまうのだろうか」という同じ問いを常に投げかけることができただろう。

強者の戦略

そうすれば、最高の幸せとはくつろいだり休息したりポーカーをしたりすることにあるのではないということ人を学ぶことになるだろう。そして、ますます機械化してゆく生活に対して繊細な人たちが皆感じている直感的な恐怖は、感情的な懐古主義に過ぎないということはなく、むしろ完全に正当化されることが分かるだろう。というのも、人は人生における単純さの多くを失わないようにしていることによってこそ人間であり続けているのだが、現代の多くの発明には、人の自意識を弱体化させ、好奇心を鈍らせ、そして総体的に人を動物へと近づけさせようとする傾向がある。

【さいごに】

いかがだったでしょうか。今回の問題は文整序問題としてはかなり難易度の高いものでしたし、文章そのものも「いかにも京都大学」といった感じの硬質の文章だったと思います。まさか京都大学でこのタイプの問題が復活することはないとは思いますが（あつたらとんでもない騒ぎになるでしょうが）、かつて京都大学は 2012 年度に記号問題を突如取り入れたり（第 2 問）、更に遡ると 2005 年度には和訳すべき箇所が明示されていない問題を出したり（第 2 問）していますから、貴方が受験する年度が運悪く（良く？）例年の傾向に反した出題になる可能性は否定しきれません。ですが、前回述べたように、出題形式の変化は、必ずしも大学側が受験生に求める力が変わったことを意味しません。貴方が求められる力をちゃんと身につけさえしていれば、そして頭が真っ白になってしまわなければ、栄冠を掴み取ることが出来るはずですよ。

貴方にとって悔いの残らない入試になることを心からお祈りしています。

今年度の出題はこれでおしまいです。又ご縁があればこの場所で、或いは映像授業で、或いは教室でお会いしましょう。